

仲間と話し合うことで学びを深める子の育成

— 子どもが考えを「もつ→広げる→深める」ことのできる授業づくりを通して —

(2) 吉浜小学校

1 研究の概要

(1) はじめに

昨年度から、「仲間と話し合うことで学びを深める子の育成—子どもが考えを『もつ→広げる→深める』ことのできる授業づくりを通して—」をテーマに研究を行っている。今年度は、考えを広げたり深めたりする話し合い活動を実現するために、考えを「もつ」「言う」「聴く」力の育成を中心に据え（資料1）、本研究を進めた。

(2) 目指す子ども像

- ・課題に対して自分なりの考えをもち、仲間に伝えようとする子。
- ・仲間の考えに耳を傾け、話し合うことを通して自身の考えを広げていく子。
- ・話し合いによって広げた考えを基に、課題に対する自分の考えを見直し、深めていく子。

(3) 研究の重点

- ・子どもが他者と話し合うことのよさを感じながら、話し合いに必要な力を高めることのできる活動や授業展開を追究する。
- ・子どもが他者の考えに触れたり他者と話し合ったりすることを通して学習課題に迫っていけるような、「学びを深める発問」を追究する。

(4) 研究の手だて

① クラスタイムを活用した話し合い活動

→伝えようとする気持ちを高める。話す力、聴く力を高める。（個の力）

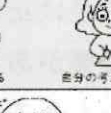
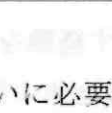
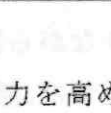
話す力や聴く力を高めることを狙った活動を推進委員が提案し、クラスタイムを使って各学級で活動に取り組む。学級内で抽出児を決め、一年間の変化を記録する。活動内容は定期的に更新する。

② 学習課題に迫るための学びを深める発問チャート

→課題に対する子どもの考えを引き出したり、話し合いによって考えを広げたり深めたりすることを支援したりしながら授業を展開していく授業力を高める。（教師の力）

自分事として捉えるための発問、考えを引き出す発問、考えの広がりや深まりを促す発問、葛藤や対立を生じさせる発問など、学習課題に迫るための発問を予想される子どもの反応と合わせてチャートに表し、学びを深める授業展開を考案する。

資料1 育てたい力

もてない			
もてる			
言えない			
言える			
聴けない			
聴ける			

2 研究の実践

(1) クラスタイム

① 実践の背景

本校では、自分の意見を相手に伝えることができる子どもが多い。しかし、相手の話を十分に聴き入れることが難しい子どもが多く見られる。また、相手の意見に興味をもって質問したり、自分の考えと比べながら違いについて話し合ったりするなど、話し合い活動を通して考えを深めていくことに課題がある。さらに、話し手の方を見て聴くことや、相手の意見を受け止めながら関わるといった基本的なスキルについても、学校全体として育てていく必要があると考えている。加えて、自分の考えや気持ちを言葉で表現することに苦手意識をもつ子どももあり、安心して話すことができる場の設定が必要であると考えた。そこで、互いの思いを大切に聴き合える雰囲気が整えば、子どもは自分の考えを言葉で表現しやすくなり、相手の意見を受け止めながら考えを深めていくことができると考えた。本実践では、クラスタイムを活用し、聴く力を高めることや誰とでも気持ちよく話せる雰囲気をつくること、話すことに慣れることをねらいとした取組を行うこととした。

② 実践のねらい

本実践では、次の点をねらいとして活動を計画した。一つ目は、仲間と互いの思いを安心して伝え合える雰囲気をつくることである。二つ目は、話し手に注目し、うなずきや表情などの非言語的な反応を用いて聴こうとする態度を育てることである。三つ目は、誰とも関わりながら話す経験を積み、話すことへの心理的なハードルを下げることである。これらを通して、学級全体の関係性をより温かく安心できるものにしていきたいと考えた。

③ 実践の内容（クラスタイムにおけるアドジャンの実施）

本実践では、週1回のクラスタイムの中で「アドジャン」を取り入れた活動を行った。活動に入る前に、安心

資料2 クラスタイムのルール

クラスタイム3つのルール

1. あいさつをする
(お願いします・ありがとうございました)
2. うなずいて 聴く
3. 先生の指示を 聴く

して参加するためのルールとして、「あいさつをする」「うなずいて聴く」「先生の指示を聴く」の三つをルールとして掲げ、その意味についても共有し、互いが心地よく過ごすための約束であることを伝えた(資料2)。アドジャンでは、子どもが「アドジャン」と声をそろえて言いながら、グーや指を出し、合計の

数に対応したお題について一人ずつ答えていく。合計が二桁になった場合は一の位を用いることにした。まずは理由を述べず、テンポよく答えることで、話すことへの抵抗感を減らすことを意識した。活動の初めには、教師が模範演示を行い、子どもが話すイメージをもてるようにした。活動中は、うなずきや表情といった聴き方を意識できるよう声かけを行い、よい姿が見られた場面では価値づけを行った。その後、フリートークの時間を設け、出た話題について質問したり、思いを広げたりする活動につなげた。

④ 実践の様子と成果

3年生の実践では、活動の始まりに元気よく「アドジャン」と声を出し、お題について自分の考えを話し始めることができていた。どのペアも笑顔で向き合い、教室全体が明るく、楽しい雰囲気の中で活動を進める姿が見られた。回を重ねるごとに、話すことへの抵抗感が減り、自分の思いや考えを相手に伝えようとする意欲も高まっていった。

質問タイムでは、活動当初は質問が思い浮かばず、時間が余ってしまうペアも見られた。しかし、繰り返し活動を行う中で、「どうしてそれが好きなのか」「なんでそれをよく食べるのか」など、相手の話を受け止めた上で質問をする姿が増え、お題について考えを深めようとする様子が見られるようになった。また、相手の話を聴きながらうなずいたり、共感の言葉を返したりするなど、聴き方にも成長が見られた。

一方で、ペアによっては緊張から相手の目を見て話すことができなかったり、質問が続かずに質問タイムで時間が余ってしまったりする場面も見られた。こうした姿から、相手を意識して話すことや、質問を広げていく力については、引き続き支援が必要であると感じられた。

次に5年生の実践では、3年生と同様に元気なあいさつから始まり、早い段階からお題について一問一答で答えることができた。またフリートークでお題についてより深く質問する場面でも、多くの子どもが積極的に質問することもできていた(写真1)。



写真1 フリートークの様子

もいたため、それぞれでお題を考え、それを紹介していく活動も行った(資料3)。子どもたちは、自分の考えたお題が出題されると嬉しそうにしていた。しかし、お題を難しくしたことで答えにくくなってしまった子どもがいたり、答えることに一生懸命になりすぎて3つのルールのうちきや先生の指示を聴くことをおろそかにしてしまう子どもがいたりした。その

資料3 子どもが作成したお題でアドジャン

ため今後は、お題を簡単なものに固定し、ペアを変えたり4人グループにしたりお題以外の部分を工夫し、話すことを楽しみながらスキルを上げられるようにしていきたいと考える。

みんなが 作って くれたよ さぜん ver. 	① 一番、好きなお題は？
	② 一番、苦手なお題は？
	③ 質問は好き？
	④ 授業中、どんなお題を聞いたり答へたりしたことがある？
	⑤ 好きなお題の生き物は？
	⑥ 好きなお題の生き物は？
	⑦ 絵と作文、どちらが好き？
	⑧ 今までに、書いたお題はありますか？
	⑨ お題、イラストや写真など、お題のイメージ、どんなイメージ？
	⑩ 自分のストレス解消法は？

⑤ 課題と今後に向けて

子どもによっては、話題を広げたり、質問することが難しかったりする姿が見られた。今後は問い返しの例やフリートークの模範を示しながら、より深い話し合いができるよう支援していきたい。また、継続的にクラスタイムを行うことで、相手の話を聴く力や、誰とでも気持ちよく話せる力を育てていく。今年度は、全校で活動の型を揃えることにも重点を置いた。型が統一されることで、教師やクラスが変わっても子どもが安心して活動できるためである。今後も型を揃え、友達との関わりを重ねる中で多様な考えに触れ、自分とは異なる意見を受け止める経験を積み、安心して思いを伝え合える力を育てていきたい。

(2) 第1学年の実践

① 主題名「ともだちのことをかんがえて〈B(10)友情、信頼〉」

② 主題の捉え

本学級の子どもたちは、困っている友達を見つけると、やさしく声をかけたり手助けをしたりすることができる。友達の口調が強かったときには、優しく伝えるよう促すこともあり、相手の気持ちを考えて行動できるときもある。一方で、活動や遊びに夢中になっていると、楽しさから相手や周りの人の気持ちが考えられず嫌なことを言ってしまうたり、やり過ぎてしまったりしてトラブルになることもある。普段、困っている友達に優しく接することができる本学級の子どもたちだからこそ、どんな場面でも友達の気持ちを考えて行動できる人になってほしいと思い、本主題を設定した。

本教材は、すずめが、やまがらの家に誕生日のお祝いに行くか、うぐいすの家である音楽会の練習に行くか迷うところから始まる。迷ったすずめは、梅の林の中にあるうぐいすの家へ行くことにするが、寂しい思いをしているであろうやまがらのことが気になり、やまがらの元へ飛んでいく話である。きれいなうぐいすの家でごちそうに囲まれ、他の鳥たちと楽しい雰囲気の中過ごしていたが、やまがらのことを思っただけで行動する姿を通して、葛藤がありながらも友達のために行動する難しさや心の強さに気付くことができる。また、悩んで行動した結果、涙を浮かべながら喜ぶやまがらの様子を見たときの気持ちを考えることで、相手のために行動したときの自分の気持ちについても考えられる教材である。

導入では、「友達がいてよかったと思うこと」について考え、本時のめあてである「友達のためにできることを考えよう」に繋げていく。展開では、自分の考えを正確に記述することが難しい子どももいるため、自分の考えを表現しやすくなるように、すずめの気持ちを赤と青で表す活動を2回取り入れる。1回目は教材をすずめがうぐいすの家へ行った場面まで読み、すずめの気持ちを問い、うぐいすへの思いを青、やまがらへの思いを赤でハートに表現させる。思いを色分けすることで、すずめの葛藤が視覚的に捉えられるだろう。そして2回目は、迷いながらもやまがらの家へ飛んで行った場面でのすずめの気持ちを問う。1回目のハートとの色の違いや友達との微妙な違いから、楽しい雰囲気の中でも相手のために行動する難しさや強さについて考えさせたい。最後の場面では、涙を浮かべながら喜ぶやまがらの様子を見たすずめの気持ちを押さえることで、友達のために進んで行動しようとする心情を育てていきたい。

③ 実践と考察

ア 手だて①「話し方名人・聴き方名人」を意識したクラスタイムでの活動

クラスタイムの活動を始めたころは、フリートークの時間に自分の話したいことについて積極的に伝えられるが、グループの子の話を遮ってしまう子どもがいた。また、グループの子の話を一生懸命聴くことができるが、自分の考えを伝えられずに活動を終わってしまう子どももいた。そのため「話し方名人・聴き方名人」をキーワードにし、話し方・聴き

方の指導をした。まずは、聴き方名人（相手の目を見て、一生懸命、うなずきながら、笑顔で、終わりまで聴く）を意識するよう指導した。活動後は自分の聴き方について振り返りをするよう促した。話し合いの様子を見て「なるほど」「私と似ているね」「それいいね」など、相手の話に対して反応している子どもの姿を学級全体に向けて紹介すると、相手の話をうなずいて聴くだけでなく、言葉で反応することができる子どもが増えた。その後、話し方名人（相手の目を見て、一生懸命、うんと口をあけて、笑顔で、終わりまで話す）を意識するよう指導した。

A児は、この活動を始めた頃、フリートークの時間には自分の話したいことについて積極的に伝えられるが、グループの子の話を遮ってしまうことが多かった。しかし、クラスタイムでの活動を通して、A児は他者の意見に耳を傾ける姿勢が身に付いた。実践時も、全体発表やペアでの話し合いをする場面で、発言者の目を見て傾きながら意見を聴く姿が見られた。

イ 手だて②学びを深める発問チャート

本教材では、主人公であるすずめの葛藤に気付き、表現することができるよう、やまがらを赤、うぐいすを青とし、どちらのことを考えているかハートに色を塗る活動を2回行った。他クラスで行った先行授業では、ハートを赤で塗る子どもが多くみられた。うぐいすに対する気持ちにも目を向け、すずめの葛藤に

資料4 二つのことりの発問チャート

迫るためには、青で色を塗っている子どもに発言を促したり、赤で色を塗った子どもに「うぐいすさんも音楽会の練習に誘ってくれたけど、どうかな」と問いかけたりすることが有効であると考え、発問チャートを用意した（資料4）。2回目の活動で、B児は赤と青で色を塗っていたが、ワークシートにはやまがらに対する気持ちしか書かれていなかった。青で色を塗った理由を問うと「練習に誘ってくれたうぐいすさんも気になる」と言い、ワークシートに書き足していた。その後、学級全体に向けて、やまがらとうぐいす両方に対する気持ちを発表することができた。ハートを赤で色塗りした子が多かったが、この意見により、うぐいすに対する気持ちにも気付くことができた。

チャートを作成し、補助発問を事前に準備していたことで、学級での全体発表や机間巡視中に考えを広げることができた。

対話活動	発問	時間
友達がいってよかったと思ったことはありますか。	・主題について自分事として捉えることができるように、「友達がいってよかったこと」を問う。	5
かしとりを手招してくれた。 一緒に帰ってくれた。 佐藤家に連れて行ってくれた。 僕の仕事を手伝ってくれた。 友達のためにできることをかんがえよう。	・内容を理解しやすいように、部活やペアワークを活用して話を読み聞かせる。	10
すずめは、うぐいすの家でどんな気持ちで話を聞いているかな。	・すずめの迷いが表現しやすいように、うぐいすを青、やまがらを赤にする気持ちを、ハートに色を塗らせる。	15
（やまがらの家【赤】） （うぐいすの家【青】） さみしい思いをしていないかな。 お祝いしてあげたいかな。 ごめんねが言いたくないかな。 みんながいてほしいかな。 やまがらの家へ行ってすずめは、どんな気持ちかな。	・やまがらを思いやるという考えに促す。うぐいすのことを気にかけて青を塗っている児童に発言を促す。	20
新年はだからお祝いしてあげよう。 誘ってくれたから、行ってみようかな。 練習もしたいけど、やまがらさんがかわいそうかな。 うぐいすさんは誘っていないかな。 うぐいすさんも音楽会の練習に誘ってくれていいかな。	・相手のために行動するとどんな気持ちになるか共感することができるように、話を聞かせる。やまがらやうぐいすの両方に対する気持ちを問う。	25
せっかくの練習日だからお祝いしてあげたい。 一人で寂しい思いをしているから行ってあげたい。 うぐいすたちも楽しい思いをしてほしいかな。 夢がやまがらを見たとき、すずめはどんな気持ちだったかな。	・自分の思いを重ねることができるよう、友達に話したいことの理由を問う。	30
こんなに喜ぶくれるなんてびっくりしたかな。 まよったけど、やまがらの方へきてよかったかな。 泣きながら喜んでくれて嬉しいかな。 これから友達にどんなことをしてあげたいかな。	・考えの深まりを支援するために、授業の始めの意見にもうれしい気持ちがあることを確認する。	35
一人だと寂しいから、一人で行く友達がいればよかったかな。 助けてもらったことをうれしかったかな。行かなくていいかな。 手伝ってもらえることをうれしかったかな。困ったかな。		40

(3) 第5学年の実践

① 主題名「集団の中での役割〈Cよりよい学校生活、集団生活の充実〉」

② 主題の捉え

本学級の子どもは、係活動や委員会活動に一生懸命取り組む子どもが多く、仲間が用事や欠席でいないときには、自ら気付いて黒板を消したり手伝ったりしながら助け合っている姿が見られる。年度当初の目標づくりでは、「初めての委員会をがんばりたい」と与えられた役割や仕事に対し意欲的な記述をしていた。一方、係の仕事を忘れておろそかにしたりしている人の手伝いを進んで行うなど、何のために手伝うのかやどのような思いで仕事に臨んでいくのかについての認識が曖昧になっている。そのため、学校内外問わずよりよい集団づくりに向けて自分の役割をどのように果たしていくべきか深く考え行動していく姿を期待する。

本教材は、主人公の健太が図書委員と地区のサッカーの副キャプテンの2つの役割を担う際の出来事を描いたものである。健太は読書週間に向けて、自ら提案して同じ図書委員の美紀と春子とともに昼休みや放課後にポスターを作ることになっていた。しかし、健太はサッカーの練習に参加するためにポスター作りに参加できていなかった。ポスターのしめ切りが迫っている中、キャプテン代理としてサッカーの練習に誘われた健太がどちらの役割を果たすべきか迷う姿からこれからの自分の生活と重ねながら集団生活での役割の大切さについて考えることのできる教材である。

本時では、学校生活を中心に自分の役割について想起させ、集団生活における役割を果たすために大切なことへの考えを深めていきたい。導入では、自分の役割がどの集団の役割なのかを明確にし、集団のために役割があることを意識させる。展開では、主人公が図書委員とキャプテン代理のどちらを選ぶかを心の数直線を利用して視覚的に考えさせる。回答に偏りが出ても選んだ役割に対してどのような気持ちで取り組んでいくのかに重点を置いて学級全体で話し合いながら深められるだろう。本教材を通して、役割とは所属する集団の中の人々に関わっていることを認識し、よりよい集団生活に向けて責任をもって自分の役割を果たそうとする実践意欲と判断力を育てていきたいと考えた。

③ 実践と考察

ア 手だて①話し合い活動

本学級で意見をもつことができる子どもが多く、特に道徳科ではプリントの発問に対する意見を書く欄を空白のままに提出することはほとんど目にしたことがない。しかし、話し合い活動となると、うまく言えなかったり、意見を伝え合うだけにとどまったりすることがある。そのため、子ども一人一人が積極的に意見を言うことができたり、話し合いに参加したりすることができるように、4月からクラスタイムを活用した話し合い活動を進めていった。4月以降、クラスタイムを活用した話し合い活動を行うにつれて、うなずきや他者の意見を否定しないなど、自分の何気ない意見を受け入れてくれる環境であったり、

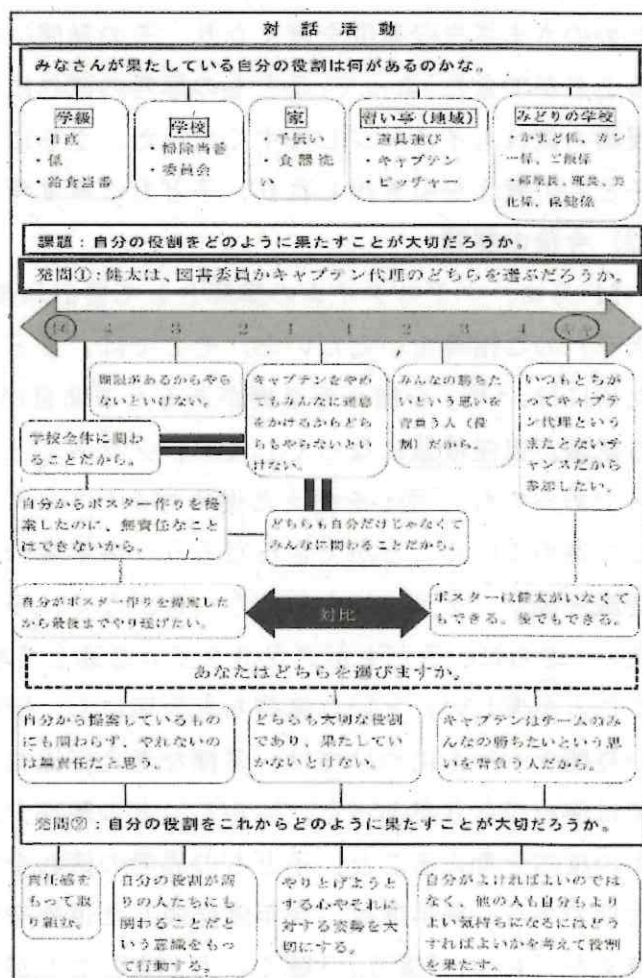
話し合うという経験を積み重ねるごとに自分の意見を支える理由を明確に表現したりすることができるようになっていった。また、道徳科では同じ意見でも考えの度合いを視覚的に表すことができるように心の数直線を用いた。これにより、話し合い活動はさらに活発になり、クラスタイムを活用した話し合い活動で形成された土台と相乗効果を生むことにつながった。

イ 手だて②学びを深める発問チャート

導入で日々の生活の中での役割を想起させた。係、委員会などの学校生活だけでなく、習い事や家の手伝いなど、学校外でもさまざまな役割があることについてふれた。展開では、本教材の課題を「自分の役割をどのように果たすことが大切だろうか」とした。事前に、課題に対する子どもの考えを引き出したり、話し合いによって考えを広げたり深めたりすることができるように支援しながら、授業を展開していくための発問チャートを用意した(資料5)。最初の「健太は、図書委員かキャプテン代理のどちらを選ぶだろうか」という発問では、心の数直線を用いて自分の意見やその理由を考えていった。それらを共有すると、図書委員寄りの意見では、「みんな(学校全体の子どもたち)に迷惑がかかるから」や「自分が提案したから最後までやり切らないと」などの責任感に関する意見が出た。一方、キャプテン代理寄りの意見では、「チームの人への迷惑」や「初めてのキャプテンをやりたい」という責任感や意欲に関する意見が出た。発問チャートであらかじめ子どもの意見を予想し、整理をしておいたことでスムーズに次の段階に進むことができた。二つ目の発問では、より自分事として捉えることができるようにするために登場人物を自分に置き換えて考えさせた。その際の話し合い活動では、「なんでそう思うの」と理由を聞いて話し合いを続けたり、「どちらも大事な役割だから」という意見をきっかけに一度ふり出しに戻って整理をしたりしようとする姿があった。

チャートを作成したことで事前に子どもの意見に対する準備ができたり、話し合いを支える手だてを講じたことにより子どもの多様な考えを引き出し、他者の意見からさまざまな視点を見出したりすることにつながったと考えられる。

資料5 「健太の役割」 発問チャート



3 成果と課題

(1) 研究の成果

今年度も昨年度に引き続き、クラスタイムを活用して話し合いの素地を養ってきた。週に一回の活動であったが、シンプルな活動で行うことができる「アドジャン」や「二者択一」を継続的に実施してきたことで、多くの子どもたちが活動に慣れ親しむことができた。また、話し合いのテーマをだれでも話せる内容に設定したことで、授業の話し合いではなかなか話せない子も、自信をもって安心して話す姿が見られた。そして、仲間の考えを受け止めながら聴いたり、話し合いが続くように質問したりする姿も見られた。さらに、授業の話し合いでも、クラスタイムの成果が生かされており、仲間の考えを聴き、それに対して自分の考えをつなげる姿も見られた。また、学級内で抽出児を決め、一年間の変容を追っていった。活動を積み重ね、抽出児の変容を記録していったことで、自分の考えを話すだけに留まっていた子が、仲間の考えに耳を傾け、仲間の考えを引き出そうとすることができたり、話し合いに消極的だった子が、話し手の目を見て聴き、活動を楽しむことができたりという変容が見とりやすかった。

また発問チャートも、昨年度に引き続き作成し実践に取り組んできた。主に道徳で作成したが、今年度は他教科でも作成した。発問チャートを作成することで、学習課題に迫るためのさまざまな発問を考えたり、その発問に対する子どもの多様な反応を予想したりすることができた。よって、子どもの思考の流れに沿った授業展開の準備をすることができ、授業の流れもイメージしやすくなった。さらに、子どもの考えに対して問い返すことで、子どもの考えを引き出したり、子どもに再度考え直す機会を与えたりすることができた。

(2) 今後の課題

11月に、クラスタイムの講師として曾山和彦先生をお招きし、「アドジャン」や「二者択一」のご指導をいただいた。そこでは、子どもが安心して活動に取り組めるようにするためには、「型」を揃える必要があるとご助言いただいた。年度当初はクラスタイムに対する認識が担任裁量になってしまい、クラスごとにばらつきがあった。どの学年、どのクラスであっても、「型」を揃えた進め方をしていくことで、次年度以降は子どもも教員も安心して進めていくことができるだろう。来年度は、年度当初にクラスタイムについての共通認識を図り、クラスによるばらつきがなく、子どもが安心して話し合えるようにしていきたい。さらに、子どもがクラスタイムを通して感じた、「仲間と話すことが楽しい、話を聴くことが楽しい」という気持ちを大切に、授業の話し合いにもつなげていきたい。

発問チャートについては、多様な考えが出てくる道徳では有効であったが、教科によっては使いづらさがあった。しかし、どの教科であっても学習課題に迫るための発問や子どもの反応を考えること、子どもの思考の流れを大切にした授業展開にすることは共通して大切である。来年度は、今年度作成した道徳や他教科の発問チャートを改善し、子どもが考えを「もつ」「言う」「聴く」力を育むことができるような授業実践を行っていきたい。